

[北総文化研究センターから]

## 北総文化研究センター主催「研究会」の経過報告(その12)

### 第58回研究会

1. 開催日 2012年4月20日(金)
2. 場所 本学2号館224ゼミ室
3. 題目 「北総の農業と食文化  
ー北総台地の農業の現況ー」

報告者 町田 武美

千葉県農業の現況について統計資料を使い説明、さらに千葉県農業における北総台地のスイカや落花生などの畑作の特徴を扱い、その中心となる落花生の八街、スイカの富里について生産の現況、特産品の歴史などを発表内容とした。

また千葉県の郷土料理のなめろう、さんが焼き、太巻き寿司などのいくつかも紹介した。

千葉県は平野と丘陵が県土の大半を占め、海拔500m以上の山地がない日本で唯一の都道府県である。冬暖かく夏涼しい海洋性の温暖な気候は農業に適しており、北総の比較的平坦な下総台地、利根川流域と九十九里沿岸に広がる平野でさまざまな農業が展開されて

いる。野菜、花き、果樹類をふくめ栽培品目が多いのも千葉県農業の特徴である。なんといっても北総地域は東京に近く、大消費地の食を支えている役割は大きく、また野菜・園芸を中心に農業産出額は4066億円全国第3位である。

全国1位の作目として、日本なし、だいこん、らっかせい、えだまめ、かぶなど10品目、第2位には、ねぎ、かんしょ、ほうれんそう、にんじん、すいかなど16品目がある。まさに大農業県を形成している。

地域別農産物の特徴は成田市、香取市のサツマイモ、八街市の落花生、サトイモ、ニンジン(収穫量日本一)、東庄町のカブ、銚子市のキャベツ(春収穫量・日本一)、富里市のスイカなど下総台地の畑作は千葉を代表する農業を形成している。

北総地域は23市5町である。総面積は2292km<sup>2</sup>で千葉県全体の44%の面積である。人口で見れば県人口618万7千に対し北総地域は468万と県全体の76%の人口である。発表は北総の農業の代表格でもある八街市の落花生について、その歴史、生産状況、生産振興にたいする農協、市の取り組みなどを発表した。八街市のらっかせいの作付面積802haで千葉県

一の生産地になっている。八街に落花生が導入されたのは明治29年ごろで、文違区、住野区で栽培されたのに始まり、昭和21年に当時の八街町と誉田村で、従来とはまったく姿のちがった半立種（背丈が低い）が見つかり、それを千葉県農業試験場で純系分離して生まれたのが「千葉半立」、これが味のよいことで評判になり、落花生といえば八街の名声確立につながり今日に至っている。

八街は周辺の土壌が育成に最適と言われ、落花生栽培は明治末期から急速に発展し、大正初期には特産地となり、昭和24年には耕作面積が全耕地の約80%を占め、日本一の生産地となった。そして今日、「八街の落花生」が全国に知られるようになった。八街には県の落花生研究室が独立して八街に移り、「ナカテユタカ」や「ダイチ」など多くの品種を世に送り出している。また千葉県で育種した「郷の香」種は、ゆで落花生に適した品種であり、レトルト技術の応用により、今まで農家でしか味わえなかった“ゆでたての味”一般販売を可能にした。発表は落花生の輸入動向や日本全体の生産状況の内容も含めて発表した。

（質疑応答）

千葉県全域の食文化、地域特産物にたいする意見交換がなされた。

## 第59回研究会

1. 開催日 2012年6月22日（金）
2. 場所 本学2号館224ゼミ室
3. 題目 「東日本大震災による北総地域文化財の被災と修復 —香取

市佐原地区、重要伝統的建造物群保存地区—」

報告者 町田 武美

東日本大震災による北総地域文化財の被災関連の発表は第53回及び第54回と過去2回発表している。今回で3回目になるが、復興には関係者の多大な努力と時間がかかり、本研究会による調査もその経過を追う形で現地調査など進められた。第53回研究会では被災状況の調査について、第54回では被災建物などの修復状況について、それぞれ調査経過が発表された。3回目の59回研究会の報告は、香取市佐原地区、重要伝統的建造物群の修復について、市、NPO、建物の家主の方々の修復活動を中心に、被災の全容とその取り組み状況などを発表した。

報告は最初に、これまでの調査経過が方向された。調査の実施と経過では、第1回現地調査、2011年4月14日、第2回現地調査、2011年5月19日、第3回現地調査、2012年5月11日、第4回現地調査、2012年6月15日で、資料収集先は千葉県文化財課、香取市生涯学習課、NPO「小野川と佐原の町並みを考える会」などであったことを報告、次に佐原地区重要伝統的建造物群復興の最新状況が写真などで紹介し、また千葉県全体の文化財被災の詳細も改めて紹介した。

現地NPOのヒヤリング内容の報告では、復興に果たすNPOの役割など、3.11から今日までのNPOの取り組み内容を報告した。ヒヤリングは重伝建の個別に被災内容をヒヤリングし、その詳細が把握でき、報告でその概要を報告した。被害の多くは、屋根瓦落下、壁崩落、母屋全体のゆがみ、柱ずれ、土

壁剥離・亀裂、敷地内の沈下・液状化、土壁崩落、屋根大棟・平面屋根瓦落下、側壁漆喰亀裂、内部壁損傷などであり、建物全体の崩壊はなく、その重伝建被災の特徴は

1) 屋根瓦の崩落（棟瓦崩壊、鬼瓦、屋根瓦の崩落）

2) 漆喰壁の剥落や亀裂（土蔵、店蔵の壁面、軒周りの鉢巻に亀裂や剥落）

3) 躯体のゆがみ

などで、多くの重要伝統的建造物は在来工法の土葺瓦屋根であったため大きな被害となった。土葺瓦屋根は瓦を葺き土に接着させ、屋根を葺き上げる工法で、瓦のバラツキ（ネジレ・寸法の違い）・野地ムラなどを修正でき、屋根を最も美しく葺き上げられる重量感のある重厚さを出せる工法である。また葺き土による断熱効果が得られるが葺き土を用いる為、屋根重量が重く、躯体への負担が大きい。地震等の影響を受けやすく、さらに葺き土の風化により、瓦のズレ（縦ズレ・横ズレ）が発生することがあり50年に1回程度葺き直す必要があるなど伝統工法の詳細についても報告した。

発表の総括として、文化財の修復の困難な点に同一素材、同一工法による修復が原則であるため制約要件が多く、見積もりから契約までの期間や工期自体も通常の建造物に比べ大巾にかかるようである。佐原地区の歴史的建物文化財個々の調査、修復状況などを今後継続的につづける旨の報告がなされた。特に香取佐原地区の重伝建地区、環境保存地区の建物所有者の震災前後の維持保存に対する意向調査の必要性について、調査の必要性などの意見交換が行われた。

（質疑応答）

NPOの活動内容、役割などに関する質問や調査内容についての質問があった。

## 第60回研究会

1. 開催日 2012年10月19日（金）
2. 場所 本学2号館224ゼミ室
3. 題目 「世紀転換期のイギリス美術におけるテンペラ・リヴァイヴァルについて」

報告者 堀川 麗子

### 1. 「テンペラ・リヴァイヴァル」とは

世紀転換期のイギリスにおいて、過去の技法という認識にとどまっていたテンペラ（顔料を練り合わせる結合剤として主に卵黄を用いる絵画技法）を積極的に評価し、自らの制作に取り入れる画家が多く現れた。この動きは1901年設立の「テンペラ画家協会」によって組織化され、テンペラ作品の展覧会開催や研究成果の発表といった活動を通してイギリスにこの技法を普及させるべく努めた。

運動に関わった主要人物に、チェンニーニ・チェンニーニの絵画技法書を英訳したクリスティアーナ・ヘリングラム、バーミンガムの画家サウソール、ロンドンを拠点に活動した画家マリアヌ・ストークス、批評家のロジャー・フライやエイマー・ヴァランスらがいる。

### 2. 油彩vsテンペラ

イギリスでは19世紀初頭から、古典主義の巨匠ラファエッロ以前のプリミティヴ美術に対する評価が高まっていた。世紀転換期のテンペラ復興主義もこの流れを辿ったものであ

るが、そこにテンペラ技法を結びつけた点でさらなる展開を見せたと言える。

彼らが特に評価したのは、ボッティチェッリらテンペラから油彩に移る過渡期の画家だった。これらの画家の作品は、現在のような科学的調査なしで技法を判別するのは困難であるが、ヘリンガムやサウソールらは自分たちが評価する作品が油彩でなくテンペラであることに固執している。そのことから、彼らのテンペラに対する評価は、技法がもたらす視覚的効果というよりは、その技法を選択すること自体に価値がおかれていたことがわかる。そこには、便利な技法ゆえ西洋で広まり、テンペラを中心的な絵画技法から追いやった油彩への強い批判が見出せる。

### 3. PurityとPermanence

彼らにとってテンペラとは、油彩にはない「純粋さ(Purity)」と「永続性(Permanence)」を可能とする技法であった。

基本的に油彩では色同士をパレット上で混ぜ合わせることで色を作るため、画面が暗くなる傾向がある。一方、純粋な色の層を塗り重ね、光で下層の色が透け出ることによって混色されるテンペラでは、濁色がおこらない。彼らは、色の純粋さを精神の純粋さに結びつけ、テンペラの透明性に宗教的な意味を付与した。ヘリンガムは清らかな聖女がまとう透明なヴェールの描写にはテンペラ技法がふさわしいとしている。

また、テンペラは一度完全に乾くと堅牢な画面を形成し、経年変化をほとんど起こさない。400年も前に描かれた絵画がつい今しがた彩色されたような鮮やかさを保っていることは驚くべきことであった。物理的な不変性は芸術そのものの不朽性と結びつけられた。

さらに、テンペラは明確な線と確固たる構想を必要とする技法であり、それは油彩特有の軽い筆触を駆使して描かれた同時代の印象派にはなしえない理想的な表現を可能にすると考えられた。

## 第61回研究会

1. 開催日 2012年11月9日(金)
2. 場所 本学2号館224ゼミ室
3. 題目 『百と八つの流れ星』(丸山健二) 試論-その方法-

報告者 伏見 親子

本発表は、西洋の現代批評理論を用いて日本の現代文学作品を読む試みの一環として、『百と八つの流れ星』(本学紀要第14号所収)の分析方法を述べたものである。

### 1. 西洋の批評理論と日本の文学批評

明治以後、日本文学は西洋文学の影響を受けて発展してきたが、批評においては、思想史、文学史、書評は多々あるものの、20世紀の西洋の批評理論のような体系は見られない。加藤周一が『日本文学史序説』で指摘しているが、文学史が批評理論の役割まで担っていたからであろう。

上記の点を踏まえ、本研究は20世紀の西洋批評理論の視点から、日本の現代文学を分析しようというものである。

### 2. 西洋の現代批評理論

西洋の文学批評理論は、もともとは表現と内容という「器と中身」に関して、意図、思想など内容を重んじるのが主流であった。

しかし現代になると、作品を作者の意図や

文化的背景などから切り離し、作品を完成された有機的世界と見て表現に重点を置くようになった。20世紀は批評が作家の手を離れた「別の作品」になって、独りで歩き始めた時代であると言える。

### 3. トマス・マクローリンによる現代批評理論の分類

トマス・マクローリンは現代の多様な批評理論を編著書『現代批評理論』で3つの視座（①エクリチュール、②解釈・意味、③文化的背景）にまとめた。その視座に基づいて、『百と八つの流れ星』を分析することとした。

#### 4. 『百と八つの流れ星』（丸山健二）試論

作品の特殊な構成から、〈序〉と各章の概要を初めに書き出し、次いで分析、そして脚注での解説、という3部構成の形式をとった。

#### 分析

①エクリチュール【表現】上下巻とも巻頭に同じ〈序〉を配し、次いで6頁×18編=108頁、18編×3部×2巻=108編という頁構成である。各編が他の短編と全く関わりがない一話完結方式の短編集で、筋（plot）を持っていないにも拘らず、〈序〉の主題と各編の具体例が双方向の関係を示す編成（formation）となっている。これは「胎蔵界曼荼羅」において大日と各仏が示す編成と同じである。

②解釈・意味【意図】作者の意図とは異なる読者の受容反応や解釈を極力避けるために、作者は規制を設けている。具体的には、登場人物と舞台背景の類型（type）化、厳密な語義の提示、豊富な形容表現、読者の反応を想定して列挙しては否定する手法、である。

③文化的背景 舞台は、戦後の混乱期から

経済成長を経て停滞期に入った現代の日本で、そこに作者の抱く唯識的な仏教思想が描かれる。無数（108）の煩惱と大日の「光」との双方向的な関係が生じる瞬間を、丸山健二は『百と八つの流れ星』に描いたのである。

『百と八つの流れ星』は、丸山版「現代の胎蔵界曼荼羅」と言えよう。

（質疑応答）

曼荼羅は現代のクオーク理論とも通じるのではないか。

→丸山は理系出身の作家。そういう考え方を、編成を始め作品全体に意図的に取り込んでいるようである。